

柳ノ本遺跡

— 3次調査 —

2020年

日田市教育委員会

序 文

日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西部に位置し、周囲を山々に囲まれ、そこからの豊富な水が清流となり、市の中心となる日田盆地を潤しております。この水が澄んでいることが「水郷日田」と呼ばれる所以であります。

また、文化の面では、古くから交通の要衝として重要な役割を担い、弥生時代には吹上遺跡などで豪華な副葬品をともなう甕棺墓など西北九州の文化がみられ、江戸時代には、幕府の直轄地として西国郡代筋が置かれるなどの歴史があります。

さて、本書は、病院リハビリ棟増築工事に伴って日田市教育委員会が平成29年に実施した柳ノ本遺跡3次調査の内容をまとめたものです。

柳ノ本遺跡は、日田盆地東部、標高90m前後の三隈川右岸沖積地の微高地に位置しており、これまでの調査では、弥生時代中期から古代まで継続的に営まれた集落や、弥生時代後期末から古墳時代前期の墓域などが知られています。

今回の調査では、古墳時代前期、後期や古代の堅穴住居等が確認されるなど、当時の集落の広がりなどを考える上で貴重な発見がありました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました医療法人利光会をはじめとする関係者の方々、作業に従事いただきました皆様方に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

令和2年1月

日田市教育委員会

教育長 三苦 真治郎

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成29年度に実施した柳ノ本遺跡の3次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、病院リハビリ棟増築工事に伴い、医療法人利光会の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査現場での実測は有限会社九州文化財リサーチに委託し、写真撮影は担当者が行った。
4. 本書に掲載した遺構製図、遺物実測及び遺物写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所に委託した。
5. 掲図中の方位は全て方眼北を示し、座標については、第1図は日本測地系、それ以外は世界測地系に基づいている。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
7. 出土遺物及び図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 本書の執筆・編集は上原が行った。

本文目次

I 調査に至る経過と組織	III 3次調査の記録
(1) 調査の経過	(1) 調査の概要
(2) 調査組織	(2) 遺構と遺物
II 遺跡の立地と環境	IV まとめ

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/3,000)	2	第6図 1～5号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	7
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3	第7図 ピット・検出出土遺物実測図 (1/4)	7
第3図 調査区配図図 (1/600)	4	第8図 出土石製品実測図 (4・8:1/2、それ以外は2/3)	8
第4図 調査区全体図及び土層図 (1/100、1/40)	5	第9図 遺構変遷図 (1/250)	11
第5図 1～5号竪穴建物実測図 (1/40)	6		

表目次

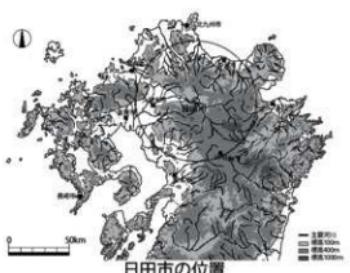
第1表 出土上部觀察表	9
第2表 出土石製品觀察表	9

本文写真目次

写真1 3次調査作業風景	1
写真2 3次調査測量風景	1

写真図版目次

写真図版1 調査区全貌 (北から)	写真図版3 5号竪穴建物遺物出土状況 (東から)
1号竪穴建物発掘状況 (西から)	調査区南壁土層断面 (北から)
2号竪穴建物発掘状況 (北から)	調査区東壁土層断面 (西から)
写真図版2	写真図版4 出土遺物
3号竪穴建物発掘状況 (西から)	
4号竪穴建物発掘状況 (東から)	
5号竪穴建物発掘状況 (南から)	



日田市の位置



大分県の行政地区

I 調査に至る経過と組織

(1) 調査の経過

平成 29 年 7 月 27 日付けで医療法人利光会より市教育委員会あてに、大字竹田字柳ノ本 646-1 について病院のリハビリ棟増築建設工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書（事前審査番号 2017026）が提出された。

開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である柳ノ本遺跡に該当し、隣接する 1・2 次調査地においても喪棺墓や竖穴建物などが確認されており、対象地にも遺跡が存在する可能性が非常に高いことが予想されたことから、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後、同年 8 月 4 日には予備調査依頼が提出され、これを受けて同年 9 月 6～8 日に重機と作業員による確認調査を実施した。

確認調査の結果、対象地の東側では、約 45～50 cm の深さで竖穴建物や溝状遺構が確認され、遺跡の存在が明らかとなった。しかし、西側については、疊層が広がっており遺跡は確認されなかった。

そこで、開発主と協議を重ね、建物構造物の範囲のなかで基礎によって削平が及ぶ範囲（調査面積：185 m²、掘削面積 143 m²）を中心として発掘調査を行うこととなり、平成 29 年 10 月 2 日に事業主との委託契約を取り交わし、10 月 17 日から 11 月 21 日までの間、発掘調査を実施した。また平成 30 年 7 月 2 日から 7 月 31 日の間、整理作業を実施し、平成 31 年度に報告書作成を行った。

現地での発掘調査及び整理作業の経過は次のとおりである。

平成 29 年 10 月 17 日 重機による表土除去を開始

10 月 18 日 表土除去及び遺構検出を開始

10 月 25 日 遺構掘下げ開始

11 月 10 日 調査区全体の撮影を実施

11 月 15 日 埋め戻し開始

11 月 21 日 現地での作業完了

平成 30 年 7 月 2 日 整理作業を開始

7 月 31 日 整理作業を終了

(2) 調査組織

平成 29～31 年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三告眞治郎（日田市教育長）

調査統括 梶原康弘（文化財保護課長：29・30 年度）

宮本達美（同課長：31 年度）

調査事務 古賀信一（同埋蔵文化財係主幹（係総括）/ 平成 29 年度）

安岡佳克（同主幹（係総括）：平成 30 年度～）

河津秀樹（同主幹：令和元年 7 月～）今田秀樹（同主査：平成 30 年度～）、行時桂子（同主査）、

若杉竜太（同主査：～平成 30 年度）、渡邊隆行（同主査：～平成 29 年度）、長祐一郎（同主査）、

樋口かおり（臨時職員：令和元年 5 月～）

調査員 上原翔平（同主任）

発掘作業員 小野昭宣、小野裕史、加藤祐一、河津モリ、北澤幾子、合原建國美、坂本隆、坂本由紀子、

佐藤洋子、谷口なつ子、長谷部修一、財津真弓、森山敬一郎、和田征二

整理作業員 立川幸子、千原加代子



写真 1 3次調査作業風景



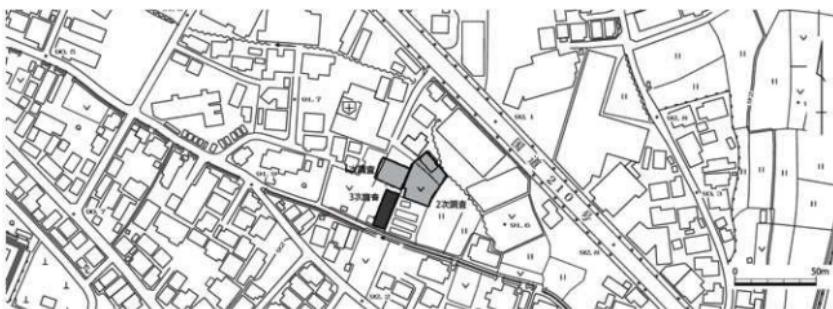
写真 2 3次調査測量風景

II 遺跡の立地と環境

柳ノ本遺跡は、日田盆地中央部の三隈川（筑後川）右岸に広がる周辺との比高差は2～3mほどの沖積微高地に位置している。宅地開発によって旧地形の詳細は不明だが、この冲積地一帯の高い場所は南北最大200mほどの幅で東西500mほど続いており、この微高地上に遺跡が広がっていると想定される。

この沖積微高地は、筑後川上流域の大山川と筑後川の支流である玖珠川が合流する地点より500m程下流域に位置しており、合流地点より運ばれる河川堆植物によって形成されたものと想定され、北側の丘陵との間にはやや低く後背低地が広がっている。これまでの発掘調査の成果では、この微高地は礫と砂によって形成されていることが判明している。

この一帯の大部分は、戦後まで河川流域の旧道沿いに住宅が立ち並ぶ程度で、微高地周辺は水田や畠地であった。しかし、現在では微高地の旧地形が判然としないほど住宅が立ち並んでいる。昭和57年に偶然にも壺棺が発見されたことから遺跡の存在が周知されたものの、それ以降は平成26年度に柳ノ本遺跡1次調査が行われるまでの約30年近く本格的な発掘調査は行われていなかった。



第1図 調査区位置図 (1/3,000)

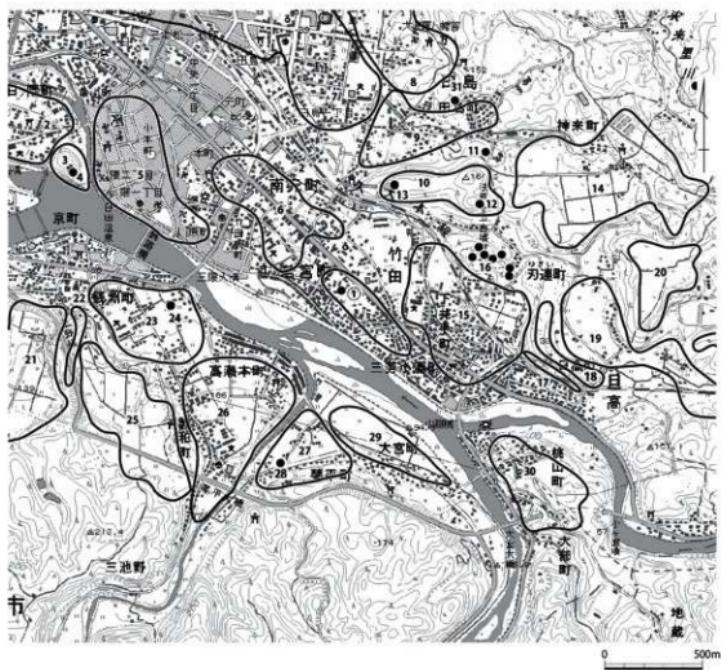
以下、遺跡周辺の歴史及び遺跡について概観する。

柳ノ本遺跡では、昭和57年の壺棺発見以後、周辺での調査は行われていなかったが、平成26年、平成27年度に1・2次調査と調査が行われ、徐々に周辺の状況が明らかになりはじめている。また、遺跡北東側の沖積地には縄文時代後期の集落跡や中世の建物群が発見された上井手遺跡(15)があり、その背後の台地・丘陵地一帯には会所山遺跡(10)、元宮遺跡(14)、東寺原遺跡(20)、平松遺跡(18)など集落遺跡のほかに会所山古墳(12)、鳥羽塚古墳(13)、東寺横穴群(17)、装飾古墳1基を含む法恩寺山古墳群(16)といった古墳群が広がるなど多数の遺跡が密集している。さらに盆地中心部では日田条里遺跡(7)、大波羅遺跡(8)、会所宮遺跡(9)といった多数の遺跡が展開しており、柳ノ本遺跡が所在するこの一帯は、豊後國風土記に記される古代日田郡を治めた日下部氏の祖先の邑阿自の本拠地とされる日田郡5郷の一つ、刃連郷に該当すると考えられている。また、西側の三隈川右岸には弥生時代の包含層や古墳時代後期の堅穴住居跡などが発見された入龍遺跡(6)のほか獸帶鏡が出土した日隈古墳(4)や中世建物群が発見された村前遺跡(2)などの遺跡があるが、なかでも城下町遺跡(隈町)(5)と日隈城跡(3)は近世日田の礎となった遺跡で、いまでも寺社群が総構えの城下町の外に残っており、当時の堅牢な造りが推測される。一方、三隈川を挟んだ対岸、南側の台地上には弥生集落や古代集落が発見された上野遺跡(21)、古墳時代の集落の陣ヶ原遺跡(25)、古

墳から中世の集落の高瀬条里遺跡（23）や惣田遺跡（27）、大宮遺跡（29）、大部遺跡（30）などとともに姫塚古墳（24）、惣田塚古墳（28）などの古墳時代の墳墓も展開している。

このように、遺跡周辺には縄文時代から近世にかけての遺跡が三隈川両岸に展開しており、さらに、近世においては、遺跡南西の河川沿いには筑後川通船の港湾となる竹田河岸が設けられているなど、三隈川を中心とした河川交通網の中心的な場所であったと推察される。

（参考文献）『日田市史』日田市 1990 ほか日田市教育委員会発行の関係道路報告書など



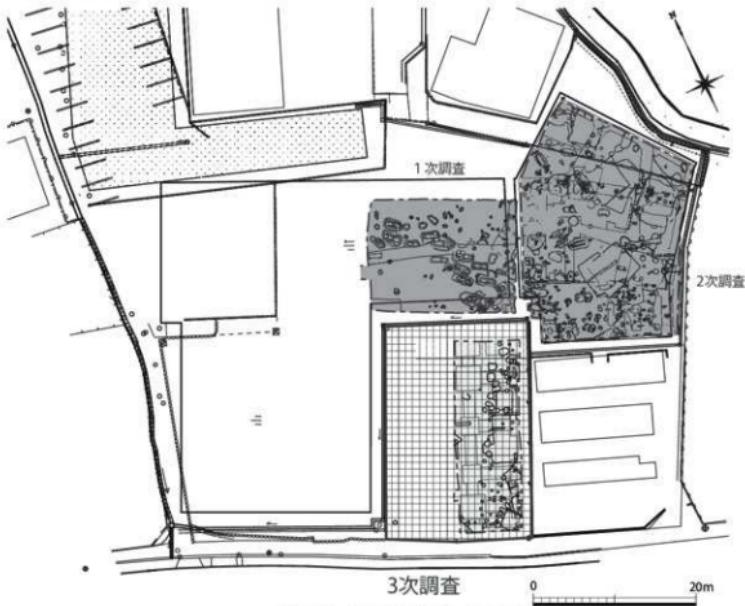
① 柳／本道跡	11 田島古墳	21 上野遺跡
2 村前道跡	12 金門山古墳	22 上野横穴墓群
3 白隈城跡	13 鳥羽塚古墳	23 錦洲遺跡
4 日隈古墳	14 元宮遺跡	24 姫塚古墳
5 城下町遺跡（隈町）	15 上井手遺跡	25 隆ヶ原遺跡
6 入鹿遺跡	16 法要寺山古墳群	26 高瀬条里遺跡
7 日田東里遺跡	17 豊作横穴群	27 惣田遺跡
8 大宮遺跡	18 平松遺跡	28 惣田塚古墳
9 金所宮遺跡	19 古金遺跡	29 大宮遺跡
10 金所山遺跡	20 東寺原遺跡	30 大部遺跡
		31 丸尾古墳

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

III 3次調査の記録

(1) 調査の概要（第3-1図、写真図版1）

調査対象地は、調査直前まで畠地として利用されており、予備調査では北東側で現地表面からの深さ約45～50cmで弥生～古墳時代と考えられる竪穴建物などが確認されている一方、南西側では遺構・遺物は確認されず、礫層が広がっている状況を確認したことから、建物予定地のうち遺構の所在する可能性の高い範囲185m²を調査対象とした。



第3図 調査区配置図 (1/600)

また、調査対象範囲の内、基礎によって遺跡が削平される範囲については掘下げを行い、それ以外については遺構検出に留めた。

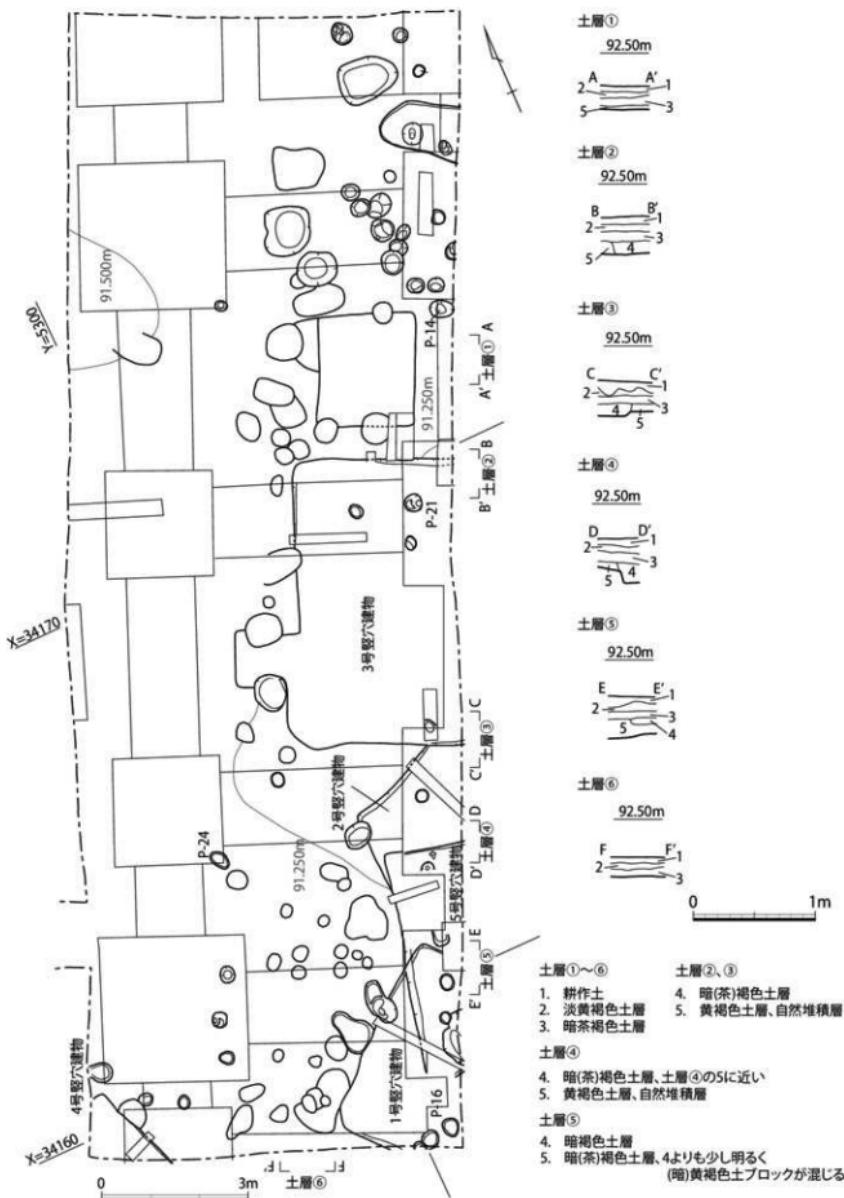
調査は調査区北東側から重機により表土除去を行った。予備調査の結果どおり、耕作土直下の深さ45cm程度で黄褐色土の地山が検出され（第4図）、この層を遺構検出面と判断した。最終的には竪穴建物5棟、ピット多数が検出された。

以下、検出された遺構および出土遺物の説明を行う。なお、遺物の時期比定にはIVに提示した時期比定参考文献を利用し、該当型式は著者名等を付して解説するものとする。

(2) 遺構と遺物（第5～10図）

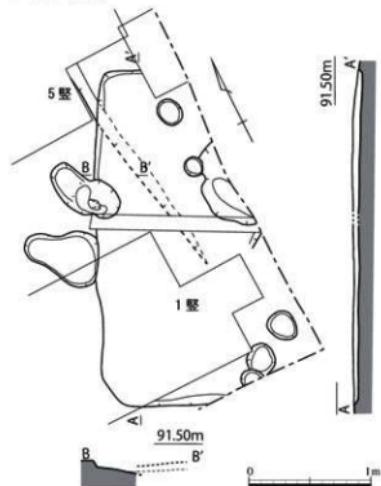
竪穴建物（第5～9図、写真図版2）

調査区全体で5基の竪穴建物を確認している。そのほとんどが調査区東側に集中して検出されている。
1号竪穴建物（第5図、写真図版2）は調査区南東隅に位置する。5号竪穴建物を切っており、東側半分が調査区外に延びる。規模は、南北4.1m、東西1.6m+αを測り、深さは約10cmである。住居であることを示すよう

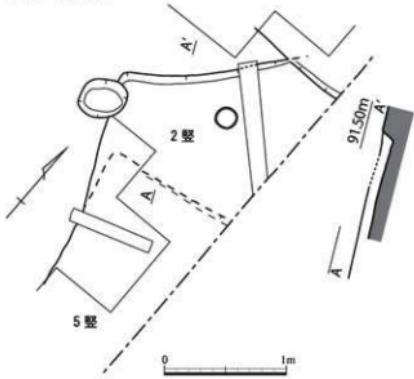


第4図 調査区全体図及び土層図 (1/100, 1/40)

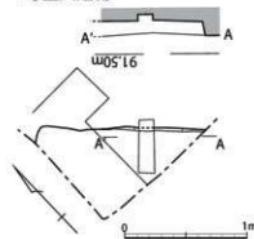
1号竪穴建物



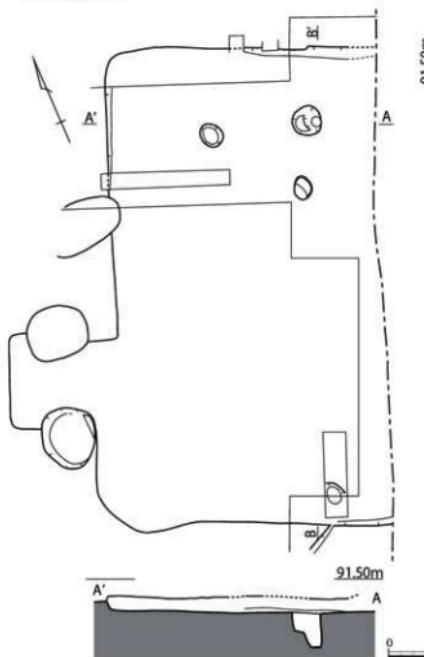
2号竪穴建物



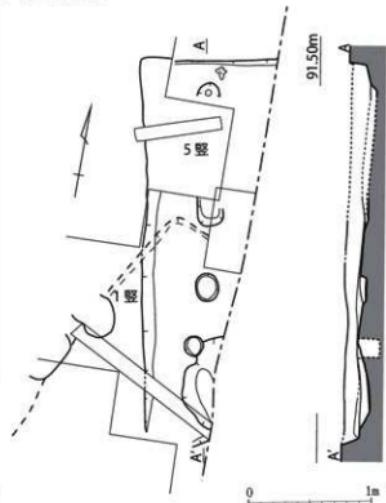
4号竪穴建物



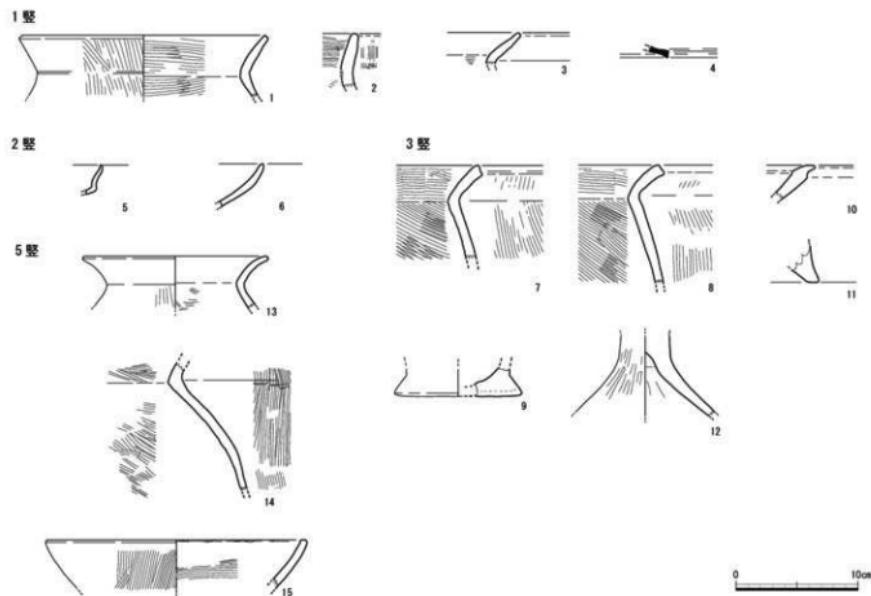
3号竪穴建物



5号竪穴建物



第5図 1～5号竪穴建物実測図 (1/40)



第6図 1～5号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

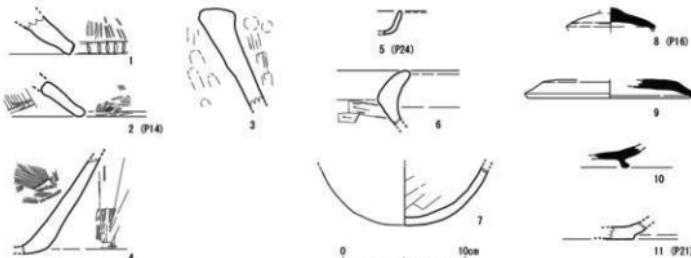
な主柱穴などは確認できなかった。平面形状は、検出状況から方形を呈すると想定される。

遺物（第6図、写真図版4）は弥生土器甕や検出時に須恵器蓋が出土している。時期については、甕が弥生後期後半以降、蓋はその形状から中村編年IV-2期頃（8世紀前半代）と想定しておきたい。

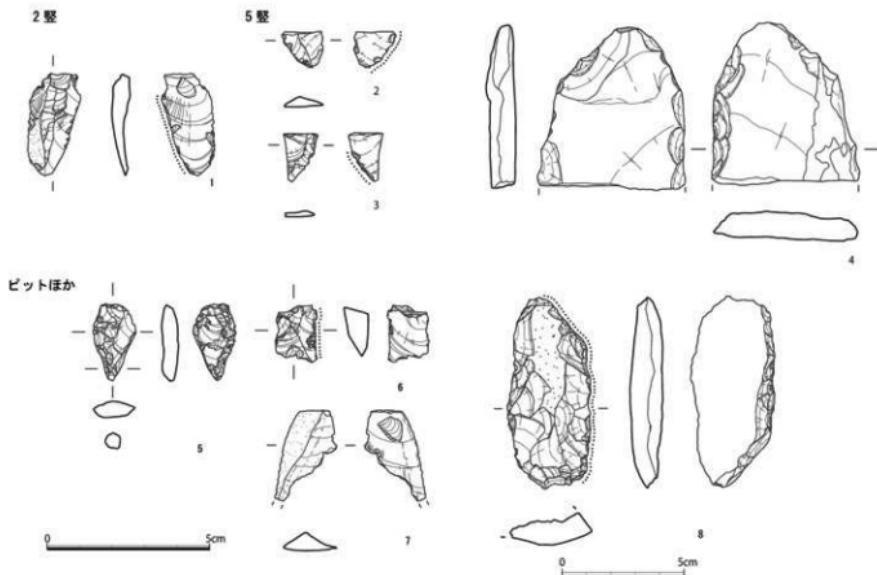
2号竪穴建物（第5図、写真図版2）は調査区南東に位置し、5号竪穴建物を切る。東側の半分以上が調査区に延びると想定される。規模は、南北 $1.8\text{ m} + a$ 、東西 $2.3\text{ m} + a$ を測り、深さは約20cmである。住居であることを示すような主柱穴などは確認できなかった。平面形状は、検出状況から方形を呈すると想定される。

遺物（第6・8図、写真図版4）は土師器甕や剥片等が出土している。時期については、甕は6世紀代と想定しておきたい。

3号竪穴建物（第5図、写真図版2）は調査区中央部よりやや東側に位置する。東側の一部が調査区外に延びる。



第7図 ピット・検出時出土遺物実測図 (1/4)



第8図 出土石製品実測図 (4・5: 1/2、それ以外は 2/3)微細剥離痕の範囲

規模は、南北約 5.8m、東西 3.3m+ α を測り、深さは約 20 cmである。北側で検出されたピットが主柱穴となる可能性があるが、南側ではそれに対応するピットが出土していないことから判然としない。平面形状は、検出状況から方形を呈すると想定される。また、南西側に一部突出部を検出しているが、掘下げ範囲外であったこともあり用途は不明である。

遺物（第6図、写真図版4）は弥生土器甌・器台のほか、土師器鉢・高杯が出土している。時期については、甌は弥生時代後期中葉頃と想定され、鉢などについては、古墳時代前期頃と想定される。

4号竪穴建物（第5図、写真図版3）は調査区南西隅に位置する。北側の一部が検出されているが、それ以外は調査区外に延びており、平面形状は不明である。規模は、南北 2.0m+ α 、東西 1.1m+ α を測り、深さは約 20cm である。検出した範囲では、主柱穴など住居であることを示すような遺構は確認されていない。また、この遺構から土師器小片が出土しているが図示できる遺物はなかった。

5号竪穴建物（第5図、写真図版2）は調査区南東側に位置する。1・2号竪穴建物に切られる。また、東側の半分以上が調査区外に延びている。規模は、南北 4.5m+ α 、東西 1.6m+ α を測り、深さは約 30cm である。平面形状は、方形を呈すると想定される。

遺物（第6・8図、写真図版3）は弥生土器甌・鉢や打製石斧、剥片が出土している。甌については、口縁部の特徴などから渡造後期3～4期の弥生時代後期中葉頃と想定される。

その他の遺物（第8図、写真図版4）

ピットは、調査区全体で多数確認されている。竪穴建物と同様に、調査区東側で多く確認されており、西側ではほとんど見られない。複数のピットから遺物の出土はあるものの、遺構かどうかは判断できなかった。また、

掘立柱建物の主柱穴となるようなピットも確認されなかった。

遺物は、検出時に出土したものと合わせて弥生土器甕・器台・高杯・支脚のほか、土師器甕・甕・壺・須恵器壺蓋や土師質土器皿が出土している。また打製石斧・剥片のほか、尖端部は欠損しているものの石錐とみられる石器も出土している。

第1表 出土土器観察表

図版番号	遺物番号	出土遺構	種別	基盤	法規 (cm)			調査		土性	地成	色調			備考			
					口径	高さ	底径	側面	内面			内面(直)	外面(直)	外面(曲)				
第6回	1	1 窓	北	甕	廣 (19.8)	5.0	-	-	楕ハケ後ナデ	A+B+C-E	良	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい褐色	7.5YR5/4			
第6回	2	1 窓	検出	甕	廣	-	4.4	-	ハケ	A+B+C-E	良	褐灰色	7.5YR7/3	黒色	7.5YR7/1	口縁部に黒斑あり		
第6回	3	1 窓	北	甕	廣	-	2.6	-	ヨコナデ 楕ハケ	A+C-H	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい 黄褐色	10YR7/3			
第6回	4	1 窓	検出	圓筒甕	高杯	-	0.9	-	回転ヨコナデ	H	中や 平	灰色	N7/0	灰色	N7/0			
第6回	5	2 窓	土師器	甕	-	-	2.4	-	ヨコナデ	A+C-E	良	相色	5YR5/6	相色	5YR5/6			
第6回	6	2 窓	土師器	甕	-	-	3.5	-	ヨコナデ	A+B-D-F	良	相色	7.5YR7/6	相色	7.5YR7/6			
第6回	7	3 窓	北2	甕	廣	-	7.7	-	楕ハケ	楕ハケ後ナデ 楕ハケ	良	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい褐色	7.5YR5/3			
第6回	8	3 窓	北2	甕	廣	-	9.7	-	楕ハケ	楕ハケ後ナデ 楕ハケ	良	相色	7.5YR5/6	相色	7.5YR6/6			
第6回	9	3 窓	北1	土器	胎台	-	3.0	-	ナデ	A+B-C-E	良	相色	7.5YR5/6	相色	7.5YR6/6			
第6回	10	3 窓	北	甕	廣	-	2.2	底肩	-	不明	不明	A+B+C-E	良	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	内面に黒斑あり
第6回	7	3 窓	南	土師器	鉢	-	2.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	A+B-D-G	やや 良	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい 黄褐色	10YR7/1		
第6回	12	3 窓	土師器	高杯	-	6.6	-	-	ヘラミガキナデ ナデ	A+B+C-E	良	にぶい褐色	7.5YR7/6	にぶい褐色	7.5YR5/2			
第6回	13	5 窓	北	甕	土器	廣 (15.0)	4.3	-	-	ハケ	ハケ	B+C	良	にぶい褐色 褐灰色	7.5YR7/4	にぶい 褐色	7.5YR7/4	
第6回	14	5 窓	1	甕	土器	直	-	10.3	-	楕ハケ後ナデ 楕ハケ	A+B+C-E	良	灰褐色	10YR5/2	黒褐色	10YR5/1		
第6回	15	5 窓	北	甕	土器	鉢 (21.2)	4.0	-	-	楕ハケ	楕ハケ	A+B+C-E	良	にぶい褐色	7.5YR7/4	にぶい褐色	7.5YR7/4	
第7回	1	検出	2 窓 付添	土器	胎台	-	3.2	-	ヨコナデ	楕ハケ後ヨコナ デ	A+C-H	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい 黄褐色	10YR7/3	端部に剥け目あり	
第7回	2	P14	甕	土器	高杯	-	2.8	-	ハケ後ナデ	ハケ後ミガキ ナデ	A+C-H	良	浅黄褐色	7.5YR8/6	浅黄褐色	7.5YR8/6	脚部に穿孔あり	
第7回	3	検出	3 窓	甕	支脚	-	8.0	-	ナデ+オサエ	ハケ後ナデ オサエ	A+B	良	相色 褐灰色 にぶい褐色	5YR6/6 5YR4/1 7.5YR7/4	相色	7.5YR6/6		
第7回	4	検出 付添	甕	土器	廣	-	7.9	-	ハケ後ナデ	楕ハケ後ナデ H	良	浅黄褐色	10YR8/4	浅黄褐色	10YR8/4	外面上に黒斑あり		
第7回	5	P24	土師器	甕	-	1.9	-	-	楕ナデ	楕ナデ+ナデ	C-D	良	相色	7.5YR7/6	相色	7.5YR7/6		
第7回	6	検出	土師器	甕	-	4.5	-	-	ケズリ	A+B+C-D-E	良	相色	7.5YR5/6	相色	7.5YR6/6			
第7回	7	検出	土師器	直	-	4.8	-	-	ヘラケズリ	ナデ	A+B-C-E	良	赤色	10YR5/6	赤色	10YR5/6	外面上に黒斑あり	
第7回	8	P16	圓筒甕	高杯	0.72	1.7	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナ デ	A+E-H	良	オリーブ褐色	7.5YR3/1	暗灰色	N3/0	つまみ付は 2.1 cm	
第7回	9	検出	圓筒甕	直	(13.5)	1.5	-	-	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	C-E	良	周色	7.5YR5/1	周色	7.5YR5/1		
第7回	10	検出	圓筒甕	环	-	1.6	-	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	E	良	灰色	5Y5/1	灰色	5Y4/1		
第7回	11	P21	土師質	直	-	1.4	-	-	ナデウエクナ デ?	ナデナ	A+C-B-D-E	良	相色	7.5YR7/6	相色	7.5YR7/6		

※法規の単位はcm。○は残存と復元箇所を示す。

記号: A: 内面石 B: 石英 C: 石英石 D: 小白色粒子 E: 白色粒子 F: 黑色粒子 G: 青色 H: 研磨石 I: 浅灰色粒子

第2表 出土石製品観察表

図版番号	遺物番号	出土遺構	種別	基盤	法規 (cm)			重さ (g)	材質	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
第8回	1	2 窓	使用麻削片		3.15	1.60	0.50	1.8	黒曜石	圓錐的錐形有
第8回	2	5 窓	使用麻削片		1.1	1.3	0.3	0.3	黒曜石	圓錐的錐形有
第8回	3	5 窓	使用麻削片		1.5	1.1	0.2	0.2	黒曜石	圓錐的錐形有
第8回	4	5 窓	打製石斧		6.7	6.05	1.3	57.9	流動岩	
第8回	5	検出	石器		2.35	1.3	0.5	1.6	黒曜石	
第8回	6	P15	使用麻削片		1.8	1.3	0.8	1.2	黒曜石	圓錐的錐形有
第8回	7	検出	使用麻削片		2.6	2.0	0.55	1.6	黒曜石	圓錐的錐形有
第8回	8	検出	打製石斧		7.8	3.4	1.0	36.0	流動岩	

IV　まとめ

今回の発掘調査では、前章まで見てきたように、弥生時代後期から古代までの遺構を中心に、ほぼ同時期の遺物が出土した。この調査成果に1・2次調査の成果をあわせ以下にまとめたい。

遺構としては、対象地内の北東側で5基の竪穴建物を確認した。なお、予備調査などの結果から、今回の開発対象地内のうち、南西側には礫層が広がっており、この範囲には遺構は確認されていない。1次調査においては、こうした礫層のなかでも比較的地盤の安定した場所で遺構が確認されていたが、3次調査では、こうした状況は確認されなかった。

3次調査で検出された遺構の時期については、調査区全体の検出作業を行ったものの、遺構を掘下げた範囲が建物基礎設置部分に限られており、先後関係が明確にできなかったこと。また、検出した遺構の大部分が調査区外に延びており、判断が難しいことなどから、各遺構の出土遺物からその所属時期を想定していく。

検出された遺構の中で最も古い時期と想定されるのは、3・5号竪穴建物である。5号竪穴建物は1・2号竪穴建物に切られており、平面形状は明確ではない。これらの遺構は、出土遺物から弥生時代後半～古墳時代前期頃と想定される。次いで、2号竪穴建物はこれまでの調査で確認されていなかった古墳時代後期の時期と想定され、1号竪穴建物については、出土遺物から古代（8世紀代）と想定される。

以上、今回の調査をまとめる。

3次調査では、1・2次調査で発見された墳墓群が確認されなかったことから、墓域はこれ以上南側に広がらないと考えられる。

また、今回の調査地は2次調査で確認された集落の生活空間の延長と考えられ、南西側については礫層が広がり遺構は確認されなかったことから、この集落の西端を想定することができた。

このほか、これまで確認されていなかった古墳時代後期の遺構が確認されたことで、この集落が同一立地内で継続的に営まれた拠点的な集落であろうと想定した前回の調査結果を裏付けることができた。

このように今回の3次調査においても、日田盆地内の歴史を考える上で貴重な成果があったものと言える。

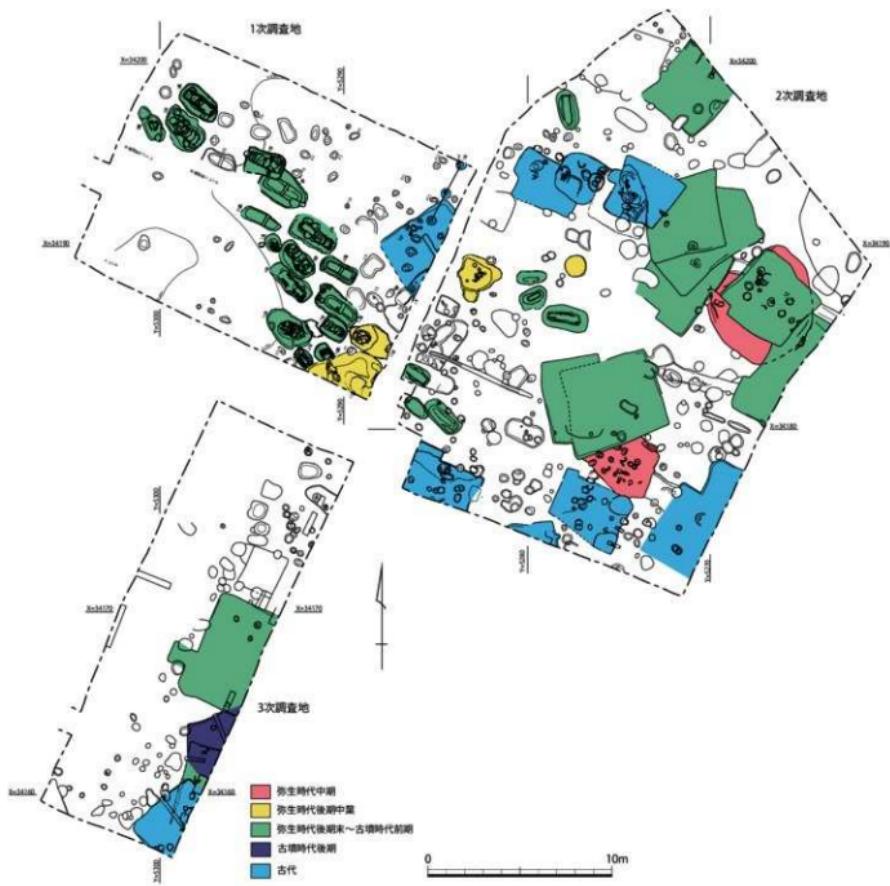
◀時期比定参考文献▶

重藤輝行 「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器・その編年と地域性』- 第5回九州前方後円墳研究会発表報告資料 2002

田沼昭三 「須恵器大成」角川書店 1981

渡邊隆行 「調査総括 - 日田市域の弥生土器の変遷と吹上道路出土土器の特色」『吹上道路VI』日田市埋蔵文化財調査報告書第112集 2014

渡邊隆行 「筑後川上流域の古式土師器の状況」『九州島における古式土師器』第19回 九州前方後円墳研究会 2017



第9図 遺構変遷図 (1/250)

写真図版 1



調査区全景（北から）



1号竪穴建物発掘状況（西から）



2号竪穴建物発掘状況（北から）



3号竪穴建物発掘状況（西から）



4号竪穴建物発掘状況（東から）



5号竪穴建物発掘状況（南から）

写真図版 3



5号竪穴建物遺物出状況（東から）



調査区南壁土層断面（北から）



調査区南壁土層断面（北から）



6-1



6-6



7-1



6-7



6-8



7-4



6-9



6-12



6-13



7-3



8-5



8-5



7-3



8-4

報告書抄録

ふりがな	やなぎのもといせき
書名	柳ノ本遺跡
副書名	3次調査
卷次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第138集
編著者名	上原 翔平
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-8601 日田市田島2丁目6番1号 電話0973-24-7171、FAX 0973-24-7024
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2丁目6番1号
発行年月日	2020年1月24日

所管遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柳ノ本遺跡 3次	大分県日田市大字竹 田字柳ノ本 646-1	44204-6	204163	33° 18' 30"	130° 56' 35"	171017～ 171121	185 m ²	記録保存調査

所管遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳ノ本遺跡 3次	集落	弥生 古墳 古代	竪穴建物、ピット	弥生土器、土師器、須恵器	

要約	遺跡は日田盆地東部の三隈川右岸に広がる冲積微高地に位置する。本遺跡は今回の調査を含め、3次(箇所)にわたる調査が行われており、弥生時代中期後半から古代に至る密度度の高い集落と墳墓群で構成される遺跡であることが明らかとなっている。 3次調査では、これまで確認されてこなかった古墳時代後期の遺構が確認されたことで、この集落が縦横的に並んでいたこと、また、これまでの調査で確認してきた墳墓群が発見されなかつたことで、墓域の南限を想定することができた。
----	---

柳ノ本遺跡 3次調査

日田市埋蔵文化財調査報告書第138集

2020年1月24日

編集 日田市教育庁 文化財保護課

877-8601 大分県日田市田島2丁目6番1号

発行 日田市教育委員会

877-8601 大分県日田市田島2丁目6番1号

印刷 尾花印刷有限会社

877-0026 大分県日田市田島本町8番8号

